

## 編集後記

本号の巻頭を飾る「Translation: Inter-lingual Construction of Gender 翻訳がつくる日本語」は、本学会評議員でもある中村桃子氏による約一時間の英語講演の採録である。日本語の典型的な「女ことば」「男ことば」は、実生活で使われるというよりも、ヴァーチャル日本語（金水敏氏提唱）として女や男、子どもや老人、あるいは日本人に対する非・日本人というような役割を示すことばとして用いられる。そんなヴァーチャル日本語が翻訳文学、洋画字幕、ドラマの吹き替えなどで無批判に使われると、文化や性別、エスニシティーの違いを単に便利に書き分けるといっただけにとどまらず、ある種の偏見や揶揄を含んだ表現になる可能性がある。そこが翻訳日本語の持つ危うさだと言える。

門倉編集委員による書評論文「おネエはジェンダー規範を越えているか？」は、クレア・マリィ『「おネエことば」論』に表れた問題意識、すなわち本来、女ことばのパロディーとして機能するおネエことばが、メディアの中で既成のジェンダー図式や異性愛規範の「再現」へと反転する点をするどく批判する、まさにその点に着目する。評者は最後に、「おネエことば」とは、実は男が言語資源として使う男ことばのことではないかと喝破しているが、昨今のおネエ・キャラがパワフルなのは、彼（女）らがまさにパロディーとジェンダー規範とのせめぎ合いの場に直に身をおいているからにほかならない。

最後に 2014 年 6 月に北九州で行われた年次大会について一言。この会は、東京地区以外の土地で開催された最初の年次大会であった。九州地区に居住する理事や会員が中心になって運営し、地元の研究者や大学院生、一般参加者に加え、ヨーロッパや中国からの発表参加者もあり、たいへん盛況だった。翌年の年次大会も、3月に京都で開催されたが、その報告は次号にて。

(第 15 号 編集委員長 斎藤理香)

## 編集委員 (\*は委員長)

小川早百合、門倉正美、\*斎藤理香、因京子、日置弘一郎

## 査読協力者

佐々木瑞枝

日本語とジェンダー  
第十五号

2015 年 8 月発行

編集者 日本語ジェンダー学会  
学会誌編集委員会

発行者 日本語ジェンダー学会

〒371-8510 群馬県前橋市荒牧町4-2

群馬大学教育学部

渡部孝子

TEL 027-220-7355

E-mail jimukyoku@gender.jp

ISBN 4-9900828

[目次に戻る](#)